（表紙）

作曲への導入基礎

幾何学調和学者[1]の旧式数学的な仮想によるものではなく、

一貫して可視化する実例をもって執筆。

第 1 章　リズムの作法、または拍子の秩序について

役に立てば自由に使うためにヨーゼフ・リーペルによって編集出版

注　音楽関係の読者にお願いしたいのは、まず、著者の親友に宛てた次の手紙、少なくともそのあとがきを見ていただくことです。P.S.以下に書かれた部分です。

レーゲンスブルク・ウィーン、Emerich Felix Bader 書店にて、1752 年

発行元で 36 クロイツェル

（手紙本文省略。以下は追記）

PS. ちなみに全くの初心者より一割でも進んでいる学習者には、君は以下の助言をしても良い。導入部におけるつまらないメヌエットの単純な説明を飛ばして、23 頁の「具体的に拍子の秩序について」から読み始めると良いです。そこには随所に必ず自分に役立つものが見つかるでしょう。いずれにしても本章につづいて出版すべき第 2 章以下はそのような読者をもっと鍛え、彼に書き方（＝作曲技法）を教えるでしょう、彼の意志さえあれば。

お元気で。

（1 頁）

第 1 章

拍子の秩序について[2]

ソプラノ歌手[3]（以下 D.）：私の師匠、山（モンスベルク）山[4]の教師は貴殿によろしくと申し、私に作曲を少し教えて下さるよう、お願いしております。

先生（以下 P.）：教師は私をこんなに信頼して下さるとは、嬉しいことです。

D.: 私が知る限り、彼は貴殿のことをとても気に入っています。

P.: これはなによりです。しかしこのような社交辞令は私たちには妨げになるかもしれない。私はこの「貴殿」という言葉に生来抵抗を感じるのです。よろしければお互いに「君」（du）で話しましょう。

---

[1] 訳者注　中世の音楽論を受け継いで音楽を数学的に論じている学者のことだと思われる。

[2] 著者注（この注の原文はラテン語。）韻律（metrum）について。しかしもっとも認められている著者たち[の著作]においても韻脚（pes）・韻律（metrum）・リズム（rhythmus）[という三つの用語]はほとんど同義で使われています。[Isaac] Vossius 著「De poematum cantu et viribus rhythmi」 [1673], 11 頁参照。

[3] 訳者注　Discantista はソプラノ歌手を指しているが、ここではまだ声変わりをしていない音楽の若い生徒を意味していると思われる。

[4] 訳者注　原文 Monsberg。ラテン語の mons とドイツ語の Berg はいずれも「山」という意味。ドイツ語では...berg で終わる地名が多いが、この地名はリーペルのフィクションである。以下の類似する固有名詞も同様。

D.: こころから喜んで。そうした方が正直な気持ちになれる。ここに私の師匠は数十枚[5]の紙を僕に渡した。君がそれに全てのルールを書き留めるためだ。

P.: すべての作曲ルールをこれだけの紙に納めるのは、無尽蔵の音楽の海を目の前にして、ドナウ川の水をこの細い噴水を通して流すに等しい。[6]

D.: しかし私の師匠は、早く終わるように頑張れといっている。そのあと彼自身が世話して、私を一人前の人にすると。

P.: そうだろう。私は多くの師匠を知っている。彼らは音楽監督と思われる人々、特に私に、助言することをやめた方が良い。君の師匠はその中でも悪い事例ではないだろうが、私は言う。二、三日で終わるということはありえない。私がすべてを簡潔で分かりやすくまとめる暇もないし。そして私は直接的にも間接的にも、また全てのルールの中からわずか一部のみを扱い、しかしその一部を子細に扱うことを好んでいる。結局私が 14 年かかって他の人から学んだものを、君は 14 日で学ぶことができるだろう。注意：君がすべてをよく理解すれば。では、君は作曲するときにたくさんのメロディーを思いついたり、アイデアが湧いたりするだろうか。

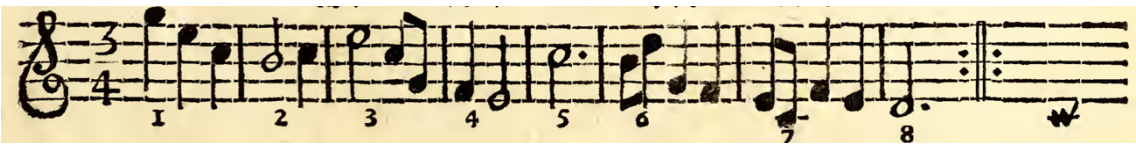
D.: それはそうだけれど、それに低音さえつけることができれば。

P.: これは一日だけで私から学べるだろう。しかしその前には、君がメロディーの切れ目を整えることについて十分な理解があるかどうか、知りたいのだ。家を建てたい人はまずその材料をそろわなければ。

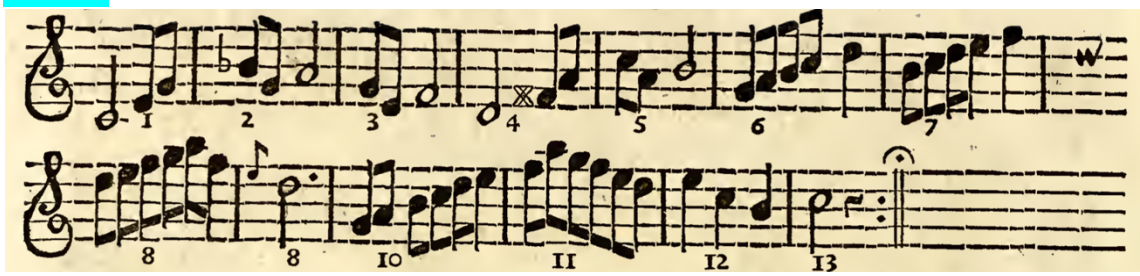
D.: では数曲のフランス舞曲、いわゆるメヌエットを作るのだ。それで私の能力が分かるだろう。

P.: まあ、メヌエットを作曲することで大きな名誉得られるわけないが、確かに名誉の一部は得られるね。しかし実施に関して、メヌエットは協奏曲、アリア、交響曲と変わらない。これは数日後明らかに分かるよ。では毎回地道に小さなところから初めよう。そこからより大きな、賞賛に値するものを得るために。

D.: 私が思うに、この世にはメヌエットを作曲することより簡単なことはない。今すぐ続けて 12 曲を作れと言われても、それぐらいはできる。例えばハ長調のものをやる。（これにはなんの問題があるか、知りたいだけだ。）



（2 頁）



小節の下に数字を置いたのは、君が、万が一（そう思わないが）僕が何か誤りを犯したとすれば、それを簡単に示すことができるためだ。まあ、自画自賛はやめようと。

---

[5] 訳者注　原文では etliche Bogen Papier とあるのは、Bogen という単位を「数多く」と書かれている。Bogen は本の中で 8 枚（16 頁）を意味する単位である。

[6] 著者注　しかし「磨穿鉄硯」ともいう。これは一種の言葉遊びに過ぎない。洒落を言う機会があればやめられないのだ。

P.: おやまあ！君は音符を区別することすら学んでいないのだ！この「メヌエット」、そう名づけて良いのか分からないが、歌えるようにできている数小節を除けば、気に入る人が居れとしても、私ならこれは一つのパイプのタバコにも値しないものだと思う。

D.: これは予想外。なぜ？

P.: 第一、どんな作品でも偶数の小節が一番聞きやすいが、特にメヌエットでは偶数小節は不可欠だ。しかし第二部は 13 小節からなっている。

第二、メヌエットのいずれの部分も 8 小節を超えないのが普通。第一部はよいが、第二部はそれに関してよくない。君が 2 小節句、3 小節句、4 小節句をどう区別するのかがまだ分からないからだと思う。したがって

第三、君は冒頭部、いわゆる主題を、2 小節句と 4 小節句を分かりやすく判別できるように作っていないのだ。

第四、私はその中に一方不動[7]（unbeweglich）の小節を見るし、他方順次進行する（パッセージを含む）小節（stuffenweise laufende Täcte）が多すぎるが、メヌエットはカデンツ（Cadenz、終止）（に入る）まで常に完全に揚げられる[8]（vollkommen erhebende）、または不完全に揚げられる（unvollkommen erhebende）音符[9]（Noten）が必要だ。

第五、第二部には第一部に類似した小節は一つも発見できない。しかしそれは第一に注意すべきことだ。協奏曲、アリア、交響曲などと同様に、メヌエットにも全体としてのつながりが必要なのだ。これほど多種多様の音符と小節があるので、私は君のメヌエットから 6 曲ほどのメヌエットを作りたくなる。

第六、博識な自然科学者からかつて聞いたことがあるが、メヌエットは第一部で上昇し、第二部で下降すれば、それはできがよいものであり、間違いなく効果的である。君のはそれにちょうど逆行しているのではないか。

第七、メヌエットに精通する識者が言うには、第 4 小節と第 5 小節（特に第一部で）をよく区別しなければならない、つまり第 4 小節が完全に揚げられる音符を含む場合は第 5 小節が不完全に揚げられる音符を含むべきだ、またその逆でも。

D.: これはひどい！ああ、2 小節句だとか、3 小節句だとか、揚げられる音符とか、パッセージとか、それがどういう意味なのかが即座に分かれば、このメヌエットの作り直しをすぐでも始めたいのだ！

P.: 2 小節句[10]は 2 小節から構成され、ほとんどの場合は動きに関して、その次の 2 小節に類似している。一例

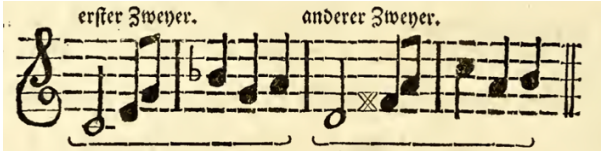
---

[7] 訳者注　リーペルが独特な用語を使っていると思われるものに下線を引いた。彼はそれをこの著書のために作ったのか、あるいは伝統的に伝わってきたものを使っているのか分からないが、ともかく他の理論書にはそれほど見られないものが多い。

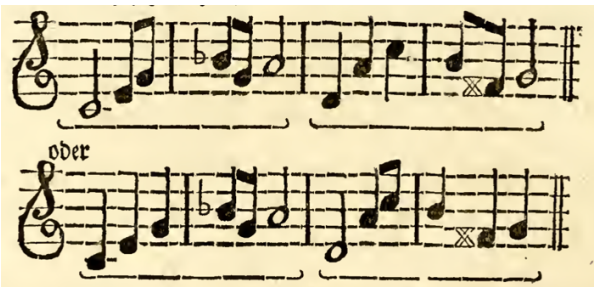
[8] 訳者注　Riepel がなぜこの単語を使っているか分からないが、後で説明されるように四分音符のリズムを聞かせる音符は erhebend で、完全の場合は一小節の中の全ての四分音符が聞かされ、不完全の場合一部のみが聞かされることである。

[9] 訳者注　音符の概念にも確認が必要。Note は notieren「記す」から来ている単語で、現代の意味では楽譜に書かれた全ての音を指しているが、18 世紀には「重要な音符」、つまり装飾音などではない音符（主に長い音価を持つ音符）を指している可能性がある。

[10] 著者注　Binarius. [ラテン語で「二つから構成される」という意味]

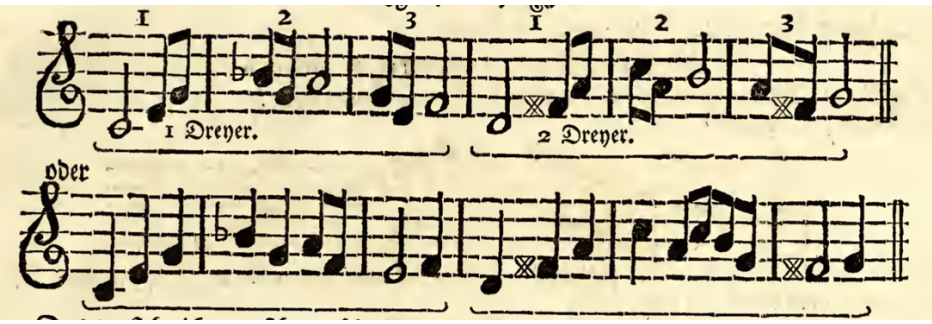


でもこのように続く 2 小節句ではかならずしも全ての音符が全く同じ動きをしなくてもよい。たとえばこのように作ってもいい。



さて 3 小節句[11]は同じく 3 小節から構成される、例えば

（3 頁）

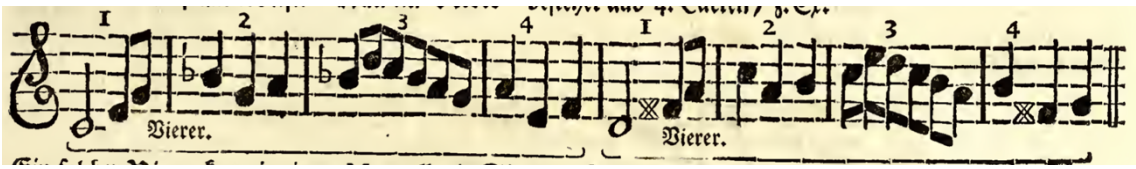


D.: これはよく分かる。見ても聞いても明らかだ。しかしどちらの方がメヌエットにより適しているのか、2 小節句か 3 小節句か？

P.: 2 小節句だ。ここで 3 小節句は何にも役に立たない。しかし 3 小節句はどういう時に使えるのか、今日中に話したいと考えている。

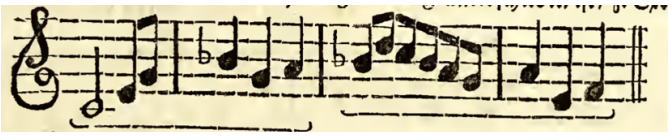
D.: つまり 2 小節句から 3 小節句、あるいは後者から前者を作ることができる、たとえば一小節を切り取ったり、付け加えたりすることによって。

P.: どんな方法でも。さて 4 小節句[12]は 4 小節から構成される、例えば



このような 4 小節句はメヌエットにおいてどこでも通用し、発言権がある。

D.: これは二つの 2 小節句とさほどの違いがないからだと思う。たとえば

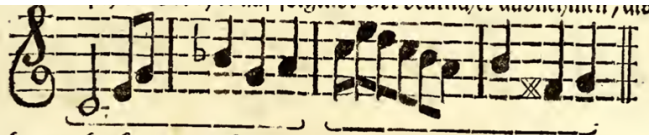


---

[11] 著者注　Ternarius. [ラテン語で「三つから構成される」という意味]

[12] 著者注　Quaternarius. [ラテン語で「四つから構成される」という意味]

P.:　その後に別の 4 小節句が続かない場合は、そうだね、まあ、なんとか、君の意見を認めても良いと思う。しかし次のように 2 小節句が君の例よりはっきりしているではないか？



D.:　確かに。しかしなぜ？

P.:　二番目の 2 小節句が一音上がっているからだ。それに対して君の 2 小節句はヘ長調にとどまっている。

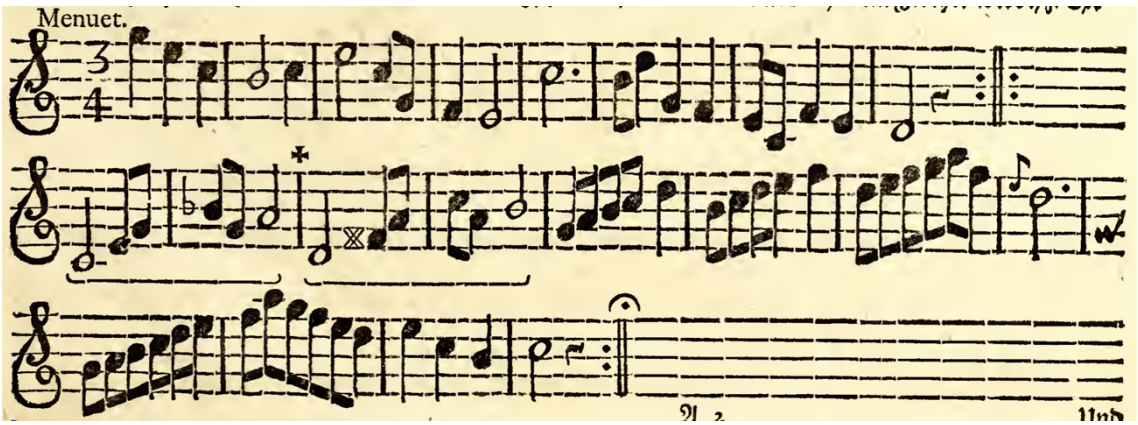
D.:　これも分かる。しかし、どちらの方が良い、2 小節句か 4 小節句？

P.:　私はその違いが分からない。

D.:　しかし私は不思議に思う、なぜ私の師匠はこういう有益な、必要なものについて一切何も教えてくれなかったか。ひょっとすると彼は 2 小節句、3 小節句、4 小節句のこと分からないかもしれない。

P.:　おだまりなさい。そうとは思えない。そうだとしたら彼はどのように自分が作曲家だと言えようか？なぜなら、拍子の秩序を完全に身につけていることは全ての楽曲の作曲技法の主要な領域の一つだからだ。フーガの種類さえ完全な例外ではない。後で分かるように。[13]

D.: では次に進もう。今私のメヌエットを第一の問題点に関して改善しよう。第二部において第 3 小節（✠）を切り取る、3 小節句から 2 小節句になるように。具体的に



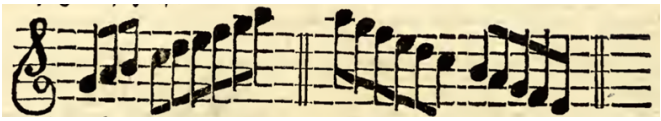
（4 頁）

そうすると第二部にはちょうど 12 小節になる。

これは第一の問題点の改善だ。

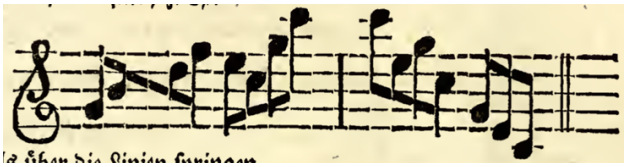
では早く教えて、<u>順次進行するパッセージ</u>とは、何なのか？

P.:　これは次のようなもの、例えば



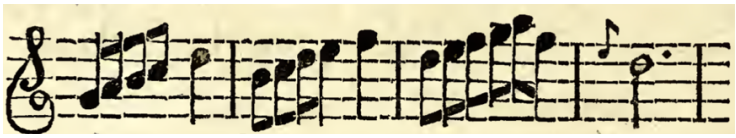
[13] 著者注　一部の古臭い蚊取り屋はそれを不思議に思うかもしれない、特に焼き立てのものを理解したくないやつ。ここには私のようなものを言っているだけだ、私が焼き立てという言葉をよく聞かなければならなかったので！

これらの音符は次々と、線も線と線の間にあるスペース[14]も飛ばさず、進行し、あるいは走るからだ。それに対して跳躍進行するパッセージ（sprungweis laufende Noten）は、例えば

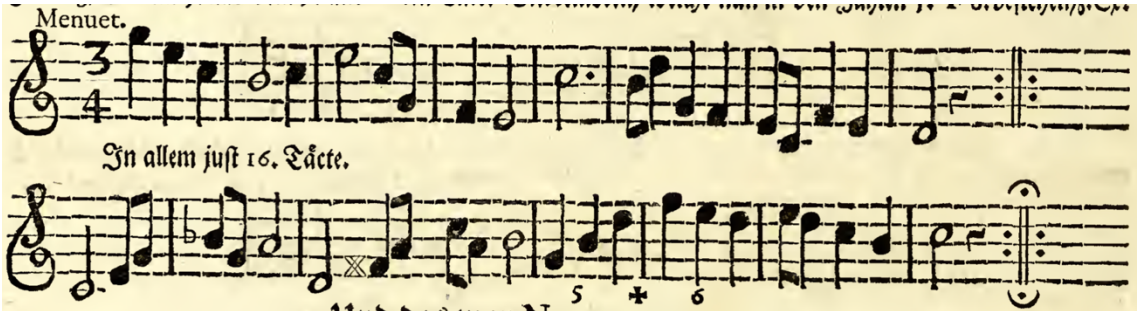


これらは部分的に（五線の）線へ、部分的に線を超えて飛ぶから。

D.: 了解。じゃあ、第二で君が両方の部分が 8 小節を超えるのが良くないと言ったので、多くの順次進行するパッセージを含む第二部の 5 から 8 小節の部分



を完全に省略し、9 小節と 10 小節（今はその番号が 5. ✠ 6. に変わっている）を四分音符に変える。具体的に

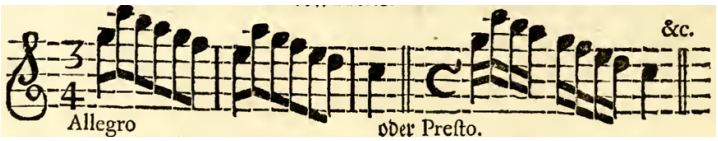


これは第二の問題点の改善だ。

しかし順次進行するパッセージがなんでダメなのか？

P.: いや、これはダメではない、交響曲、協奏曲、ソロなどの *Allegro assai* とか *Tempo presto* と *prestissimo* においては順次進行するパッセージに越したことはない。軽く流れるので弓の速いパッセージを邪魔しないから。また歌手にしても楽器奏者にしても好まれるものだが、上昇形が下降形より一層好まれる、例えば

つぎのものより弾きやすい（軽い？[15]）からだ、つまり



D.: そしてもしかするとフルート奏者、オーボエ奏者、ホルン奏者とトランペット奏者にも弾きやすいのかな。

---

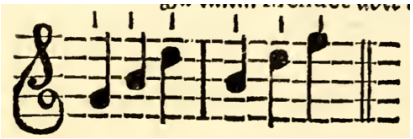
[14] 著者注　Intervallum.

[15] 訳者注　ドイツ語の leicht は「弾きやすい」とも「軽い」とも訳すことができるが、著者はどちらの意味で使っているか判断がつかない。

P.:　その通り、これらは特に。

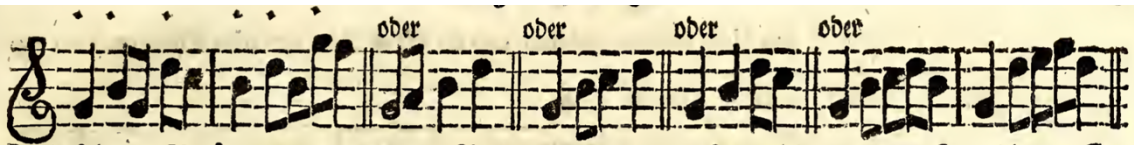
D.:　この自然の驚異をしっかりと覚えよう。作曲する時にこの件に関しては数百の考慮が可能だと思う。

P.:　しかしメヌエットには常に完全に揚げられる音符、つまり四分音符が必要だ、たとえば

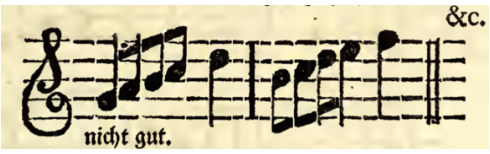


それらを変奏したり変化させたりすることも可能だ、例えば

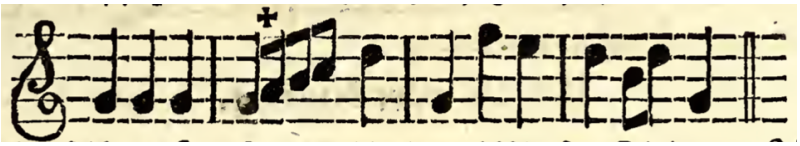
（5 頁）



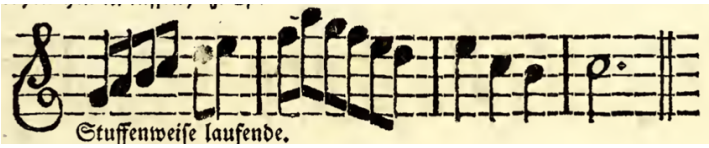
唯一次のような変化、つまり完全な四分音符が最後に置かれるものは、私ならメヌエットでは聞きたくない、たとえば



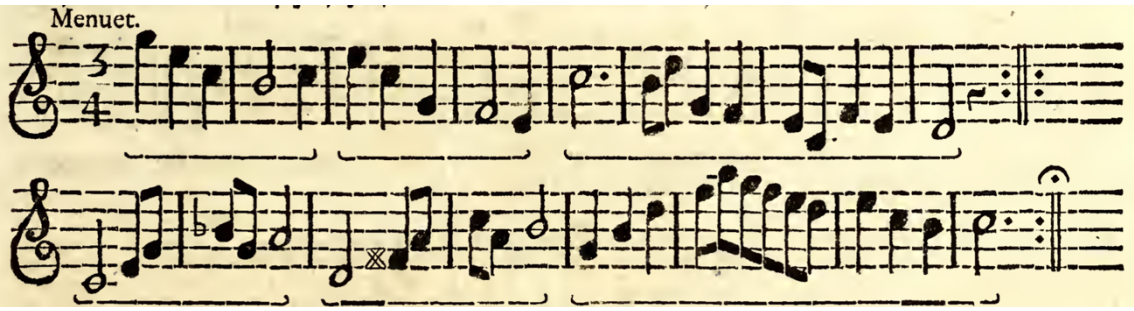
D.:　では次のような感じでもよくないだろうか？つまり



P.:　一小節だけなら✠のようなものが通過することもありえるだろう。君のメヌエットの最後の 4 小節もよろこんで残したい、つまり



D.:　なぜこれらの小節に限って？

P.:　なぜなら、メヌエットはあたかもカデンツあるいは休止へ向かおうとするからだ。働いていた人がお腹が空いて夕食へと同様に・・・笑わないでくれ！このような、そして他に千の比喩は初心者が想像しなければならない。しないと作品に空虚な、つまらない、紙のような音符を入れるだけになるのだ。

D.:　怒らないでほしい。何より私はいま第三の問題点を解決し、メヌエットをしっかりした 2 小節句と 4 小節句で作り替えたい。